

歴史点描 21 網干沖にて御用銅船座礁 2

昨夜来の暴風雨に翻弄され、和達丸は遠浅のつづく網干の浅瀬に舳先から突っ込んだらしい。船は幸いなことに損傷を免れているようだが、積み荷は公儀御用銅であるから、抜け荷または隠匿などの嫌疑が掛けられ、国元まで類を及ぼしかねない最悪の事態が頭をよぎり、船頭寅吉は動顛したに違いない。

だが寅吉はこう考えた。銅の重みで砂州に潜り込んでしまった船荷をいったん瀬取船に移し、船が浮上すると海上へ曳出し御用銅を元船へ積み込み、何も無かったことにする。しかし同じ港を同時刻に出船した類船(備州・岡山県小島船)には御用銅監視役の御船手の姿もあり、この一部始終を見守っている。

そこへ難破船見舞に駆けつけたのが興浜の年寄又兵衛と船庄屋伝兵衛の兩人だ、船庄屋伝兵衛は、加子番屋なども兼帯しつつ丸亀藩の御船手をも預る多才な人物で、じつはこの記録も伝兵衛の「手控帳」から拾いあげた一件である。明治初期に苗字を水田に改名した彼の手記については年月に関わらず追々探してみたい。

この頃の御用銅は海防のための大砲の製造か、もしくは貨幣の原材料となる付加価値の高い代物で、一刻も早くこの場を立ち去りたいとの寅吉の思いから、瀬取船だけでは覚束ないとみて、小上荷船・大過書船なども雇い、御用銅船は同日興浜の浅瀬からやっと抜け出すことが出来た。「やれやれ」と胸を撫でおろした寅吉は去り際に「この事、内々(秘密)に御座候」の言葉を残し、早々に西へと走り去った。

興浜でも箝口令が布かれ、この問題は永久に闇に葬り去られたように見えたが、古記録により明るみに出た。しかし時効はとつくに消滅し、海難事故が頻発した網干の浜辺は様変わりしている。

網干歴史講座会員

田中早春



着岸地に近い庚申堂を東へ行くと、陣屋は近い



復元された陣屋